

# 雨宮紅庵

坂口安吾

青空文庫



伊東伴作は親代々の呉服商であつた。学問で身を立てようとしたこともあつたが、一向うだつがあらないので、このごろは親代々の商人になりすましてゐた。

或日雨宮紅庵といふ昔馴染が、見知らない若い女を連れてきて、この人は舞台俳優になりたいさうだが世話をしてくれないかと伊東伴作に頼んだ。なるほど伊東伴作はその方面に二三の知人がないではないが、女優を推薦するほどの柄も器量もある筈がなし、それに打見たところ女は容姿こそ十人並以上の美しさと言へるが、これといふ特徴がなく、外貌の上ばかりではなく内面的にも全てがその通りの感じで、却つて白痴的な鈍重さを感じられるほどの至つて静的な女に見受けられるから、自分には女優を推薦するほどの手蔓もなし器量もないので言つて断つた。ところが雨宮紅庵は伊東伴作の気持には一向平気なもので、<sup>すし</sup>黜しもぢもぢしたが、それも心底から間がわるさうな様子ではなく、却つて凶々しさを暗示するやうな押しつけがましいものに見えた。さうして、必ず舞台女優でなければといふわけではなく、レビュウの踊子でもいいんだからと、独語でも呟く工合にブツブツ口の中で言つてゐたが、又その次には違つた調子で、グイと膝をのりだしながら、ダンスホールのダンスアだつていいんだから一通りのソシアルダンスを覚える手蔓だけでも与へ

てくれないかと言ひだしたりした。

雨宮紅庵は三十七歳であつた。これといふ定まつた職業も持たず、とりたてて言ふべきほどの希望といふものも持つやうには見えず、すくなくとも希望を懐<sup>いだ</sup>いて励むといふ風情は何事に就ても見受けられず、妻子もなく、財産もなく、時々住む家もなかつた。その代り、将棋と囲碁は田舎初段の腕前があり、嘗ては新聞のその欄を担当したり碁会所の師範代とも居候ともつかないことをやつてみたりしたこともあるが、その道で身を立てる気持は微塵もなかつたので長続きがせず、文学、美術、音楽、何を語らしてもとにかく相當の見識はあるのであつて、手相指紋骨相なぞにも玄人めいた蘊蓄があるかと思へば天文地質生物学などといふものに凝つてみたり、今時には珍らしく漢詩に精通してゐると思ふと二ヶ国ぐらゐの横文字も読めるといふ風に、とにかくその趣味は多方面にわたり、かつその全生活が趣味以上にでなかつた。趣味以上にでるためには必然その道に殉<sup>てい</sup>ずる馬鹿も演じとかくの批判も受けなければならぬのが阿呆らしくもあり怖ろしくもある様子にみえた。人の弱身に親身の思ひやりがあり且甚だ誠実であるといふので、窮迫の時も友達に厭やがられず愛されたものだが、その誠実や思ひやりの由来するところは、要するに人の慾念の醜さを充分に知悉し自身もその慾念に絶えず悩まされてはゐるが、さうして慾念を

露出しそれに溺れる人生こそ生き甲斐のあるものではないかと考へてみるが、自身は世間に当然許された破戒さへ為しでかす勇氣がないといふ、自意識過剰の逃避性からきてゐるやうにも思はれた。

「ダンス？」伊東伴作は鸚鵡返しに怪訝さうな面持をして呟いた。

伊東伴作はダンスホールに縁遠い人柄で、酔つ払ひでもしなかつたら冗談口一つ言へないやうな男だつた、さうして然そういふ多彩にして澆刺たる世界には多分に没交渉な生活を営んでゐるが、それを充分知つてゐる筈の兩宮紅庵が、臆する気配も見せず斯こういふことを切りだしたので吃びつくり驚した。

「いや、たつてといふわけぢやないんだ」と、紅庵は再び表面うわべだけでもちくちくとためらふ氣振ぶりをみせたが、

「別の部屋で、ちよつと君に話したいことがあるんだけど……」

と言つた。そこで二人は別室へ這入つた。

「あの人は君の恋人か？」と、別室で二人になると伊東伴作はまづ訊ねた。

「いや、さういふものではない」と、わざと周章あわてたやうな吃り方で紅庵が答へた。

ただかねて知りあひの女であるといふだけで、恋愛の交渉は微塵もなく、また、心底ひ

そかに燃やしてゐるといふ気持ちさへないのでと雨宮紅庵は同じことを繰返し繰返しくどくどと述べた。まるで故意に言はでもの言訳をするやうなくどきにも見えた。くどきを愉しむやうな秘密臭い厭味も感じられた。そのくせ、ただかねて知りあひの女であるといふ他には、どういふ筋の知りあひで、どこの誰といふことさへハッキリ言はうとしなかつた。つまり女が見るやうな姿の女で、名前は露子とよぶといふ、そのほかのことは全く伊東伴作には判らなかつたのである。

「君、あの女の生活を暫く保証してやつてくれないか？」

雨宮紅庵が改まつて切りだしたことは然ういふことだつた。

「月に三十円か四十円でいいのだ。三畳の間借りで事足りるんだからね。そのうちに女の方でなんとかするだらうよ。僕にその資力があれば自分でさういふことにしたのかも知れないが……」

「つまりあの人を二号にしろと言ふわけか？」

「いや、さういふわけぢやない。女の生活を保証してやつても、必ずしも二号ときまつてゐるわけではないからね。然し二号でもいいのだ。男と女だから話がそこまで進んでも、それは仕方がないぢやないか」

暫く話が途切れたあとで、

「君があの人を生活を保証するやうになつてから、そこは男と女だから、二人の話が自然にそこまで進んだとしても、それはそれでいいぢやないか」

紅庵はここでも故意に言ひ強めるやうな脂っこいどきを漂はせながら、同じことを重ねて言つた。自分の言葉に酔つたやうな様子でもあり、非常に穿つた親切さうな様子でもあり、幾分勝ち誇つたやうな皮肉さうな様子もあつて、まるで試験台に乗せられてゐるやうな氣持がした伊東伴作には、一つ一つの氣配がピシ／＼とこたへた。すると紅庵は、さういふ伊東伴作の内うちかぶと兜を見透したやうな穿つた調子で再び言葉をつぎたし、

「一人くらゐ隠し女を持たなかつたら、一人前の男ぢやないよ」

と、いかにもしみ／＼した顔付で言つたのが、伊東伴作の氣にさはつたが、じり／＼した氣持を起しながらも、伴作の心の流れは紅庵の言葉の魅力に自づと傾きだしてゐた。伴作はさういふ心のまとまりのない廻転に正直に身をまかせ、暫く沈黙に耽つてゐたが、

「ほんとに君はあの女に氣がないのかな」

と、紅庵を冷やかすやうに笑つて言つた。笑つて言ひはしたが、伊東伴作の言葉の奥には甚だ真剣な激しいものが漲りかけてゐて、あれだけの女なら二号にしても悪くはないな

と立派な計算が完了されてしまつてゐた。

それにしても、恋愛といふ面倒な言葉はとにかくとして、あれだけの女なら大概の男が浮気心を起すのは恐らく普通のことだらうから、あの女に気がないと云ふ紅庵は論ずるまでもなく嘘をついてゐるのだと思つた。けれども伊東伴作は紅庵の思惑に気を廻さうとしなかつた。さうすることがただ面倒に思はれたのだ。騙されるなら騙されたで一向に構はない、あれだけの女を三十円や四十円で買へるなら遊びとしても安いもので、要するに騙されてゐるつもりで、こつちもせいぜいあの女を弄ばいいわけだと考へた。伴作は三十五歳だつた。妻子もあつた。

三人は連れだつて外へ出た。歩きだしてから女に向つて、俳優とかダンサーはとにかくとして生活費の方は引受けるから一応宿を定めてみてはと話してみると、女はまるつきり感情を表はさない顔付で、別にうんとは言はなかつたが、否定の素振りをみせないことによつて承諾の気持を表はした。はじめから、どうせ話がそのへんで落付くことに覚悟をきめこんでゐたやうな様子でもあるし、何も知らない痴呆のやうな様子もあつた。白痴ぢやないのかと、伊東伴作は一時本気でさう疑らずにゐられなかつた。

ちやうど貸間ありの札を貼つた二階をみつけ、雨宮紅庵の奔走で手廻りの品だけは忽ち

のうちととのに調つてしまひ、出前をとつて夕食を終ると全く夜が落ちてゐた。気をきかしたつもりであらうが、雨宮紅庵は無理にも伴作をそこへ残して、自分は半ば周章でた形で帰つてしまつた。

伊東伴作は露子に素性をきいてみたが、紅庵の知人の妹で、今では殆んど身寄りが無いと言ふほかには、これも多くを語らなかつた。機会をみて身体に触ると、尠しも逆らはないかつた。罪惡といふ内省が絶えなためか癩癩を起すやうな気分となり、やけ自棄じみた荒々しきで無礼なくらゐる露骨に野蠻に露子の身体を取扱つても、意志のない人形のやうに自由になつた。その夜更け夢見心持で我が家へ歸つた伊東伴作は、その一夜が白々と明けても、夢見心持から覚めきることができなかつた。全てが實際あつたやうに思はれない氣持がづいてゐた。

翌日の正午頃には、ぢり／＼と押へきれない焦燥がつのつてきた。それでも三時頃までは店へでたり又ぶら／＼と居間へ戻つて寝ころんでみたりしながら、苛々する時間をつぶしてゐたが、三時の音で立ち上つて露子の下宿を訪れた。行つてみると雨宮紅庵がそこにゐて、露子と話しこんでゐた。

紅庵は自分の部屋にゐるやうな寛ろぎかたで、すつかり腰を落付けて勿体ぶつて喋つて

るたが、伊東伴作は嫉妬の苦痛を感じなかつた。寛ろいだ話しぶりにも拘らず、その口ぶりにも動作にも紅庵の宿命的な内攻生活から派生する一種陰惨な暗い傷いたましが漂ふばかりで、露子との肉体の交渉などは毛頭想像の余地がないばかりか、潜在的な姦淫の焰がちらちらと洩れ、それが却つて彼の姿を悲しいものに思はせるのであつた。けれども紅庵自身の方はさういふ風に寛いで、氣樂に陽気に喋つてゐるのがひどく愉しい様子だつた。夜がくるまで全く落付いて喋つてゐたが、夕食が終ると又もや半ばうろたえながら歸つていつた。

同じやうな日が四五日続いたのちの一日、紅庵が同じやうなうろたえ気味で歸つてしまつた後になつて、露子は伊東伴作に言つた。

「引越さして下さらない？　ここは氣兼ねがあつて厭だわ」

「家が一軒欲しいのか？」

「いいえ、一部屋でいいの。ここでさへなければどんな汚い部屋でもいいわ」

伊東伴作は考へた。一人の女に執着を持ちはじめた男の鋭敏な感覺によつて、引越しの提案がなんらかの点に於て彼に甘へる意味を持ち、同時になんらかの点に於て雨宮紅庵につながる意味があると思つた。紅庵に対して幽かながらも日増しに冷淡の度を加へるらし

い落子の気配を、その日までにそれとなく気付いてゐたのだ。なんとなく甘へるやうな落子の様子から判断して、雨宮紅庵のことはとにかく、引越の理由に就てもつと剝えぐられることを待ち構えてゐるのではないかと伴作は思った。

「この部屋は、部屋としては却々なかなか居心持がいいぢやないか」と白々しく言つてみると、  
「ええ、でも、雨宮さんの知らないところへ越したいと思つてるの」

と、果して落子はさう答へた。

「それはどういふわけだい？ 雨宮が君を口説きでもしたのかい？」

「いいえ、そんなこと有り得ないわ。あの人はそんな気の利いたことのできない人よ。悪い人ぢやないんだけど、毎日だとうるさいもの。貴方と私の生活が今日から始まることにして、それ以前のことには尠しもふれない生活がしたいの。昔があると、しつこくつていやだわ」

——どういふ昔なんだい？ と訊きたくなつた心持を伊東伴作は簡単にそらした。昔なんか問題ぢやない、これは浮気だ、たとひこれが自分の人生の重大事であり詮じつめれば中心をなす生活にしても、これは矢張り浮気で遊びで悪戯だ。女の昔の生活のことまで気に病むやうな心構えにとらはれてゐると、せつかくの悦樂が苦勞の種に変わるやうな莫迦を

みる、それもみんな心構え一つのことだと思つて深入りはしないことだと考へた。

心当りのアパートへ行つてきいてみると、探す苦勞もなく忽ち部屋がみつかったので、雨宮の知らないうちに其処へ移つた。雨宮が面喰つて訪ねてきたら、実は昔のない生活を始めたといふ女の希望であり自分の考へもさうだから、暫く露子の生活から遠距とまげかつてくれるやうにと正直に打明けて話すつもりであつた。ところが秘密の引越しが、雨宮紅庵の内攻に疲れた尖鋭な神経に応へたものか、それつきり音沙汰がなく、却つて伊東伴作の方で氣に病みだして、定めし一人で悒鬱ゆううつがつてゐることだらうが訪ねて来ればよいものをと待ち構えてゐても、全く姿を見せなかつた。くさつてゐるに違ひなかつた。

ところが二週間とたたないうちに、今度は逆な出来事が起きた。伊東伴作の知らないうちに露子がほかへ引越してしまつた。さうして行き先が分らなかつた。



アパートの管理人の話を書くと、引越しには一人の男が手伝ひに来て何くれと世話をし  
てゐたと言ふのだつた。男の眼付がひどく窪んだ感じであつて頬骨がひどく目立つ顔付だ

つたといふ話や、<sup>かすり</sup>緋の着物で帽子を阿弥陀に被つてゐたといふ話から考へてみると、そつくり雨宮紅庵に当てはまる人柄としか思はれなかつた。そこへ別な手掛りがあつた。ちやうど引越しの前日あたり、伊東伴作が落子の宿へ出掛ける時間に、雨宮紅庵に紛れのない人物がその道順の途中に当る露路の奥にうろくするのを認めたとといふ、店の者の語る噂を偶然小耳にはさんだのだ。

伊東伴作は腹が立つた。騙されてもいいと思つてゐたが、たいした騙しやうのできる紅庵でないと見くびつてゐたところから、さういふ悟つた考へ方も湧いたのである。それにあれからの毎日が騙されるやうな様子ではなかつた。落子の下宿で寛ろいでゐた紅庵の姿を思ひだしても、あれはあれだけの愉しみに酔つてゐたとしか思はれない姿で、それ以上に計画的なあくどい気配を感じだすことはできなかつた。紅庵の訪問を嫌つて引越しをせがんだ落子の様子もそれだけのもので、ほかの企らみがあるやうに思へなかつたし、引越してからの毎日は新妻のやうに新鮮で、親愛の情は言ふまでもなく落付きのある明るさが目立つて表はれてきた様子からみても、あの生活に落子の心が籠つてきた証拠はあつても人を騙す暗い蔭は認める由がないやうだつた。わけの分らないことなので無暗に腹が立つばかりだが、腹が立つと益々みんな分らなくなつてきた。アパアトへ越して後は留守のう

ちに紅庵が来たといふ形跡もなかつたやうだし、落子の方から紅庵に引越先を教へてやつたならとにかくとして、道に待ち伏せたうへ伴作の後をつけて行先を突きとめたと思はれない形跡から考へてみても、前後の様子が曖昧至極になるばかりで、筋道が立たず、腑に落ちないことばかり多いのだつた。騙され方の筋道が通らないので、腹の立ちやうまで煮えきらないやうになつてくるし、さういふ腹の立て方まで癩にさはつてくるのだつた。すると三日目に、雨宮紅庵がのこ／＼現れてきた。

「君が落子を隠したのだらう。分つてゐる。なんのための小細工なんだい？ 僕のあとをつけてきてアパートを突きとめたことも分つてゐる」

雨宮紅庵の顔をみると矢つ張りやつてきやがつたといふガツカリしたやうな気持の方が先に立つて、腹の立つことまで薄らいだのだが、とにかく改めて怒りを燃やしながらか詰つた。

「実はそのことで来たんだよ。びつくりしたらうと思つて、早く君に知らせやうと思つてゐるが、生憎の用で来れなかつた。実は今日もまだ色々忙しい用があつて……」

紅庵はひどく周章してしどろもどろの言ひ訳をしたが、腹の底では伊東伴作が本気で怒つてゐないのを見抜いて、案外落付いてゐるやうだつた。

「それに、君も教へてくれないし、あの人も言つてくれないものだから、まさかに君とあの人の関係が二号といふやうなことに進んでゐると思はなかつたので、さう素ばしい君だとは思はなかつたから、それほど心配もしてゐまいと多寡を括つてゐたのがいけなかつたんだ。それを知つてゐれば一応君にことはつてから引越しも運んだらうし、用向きを蹴飛ばしても早く教へに来た筈なんだ」

紅庵は別に恨みがましい様子でもなく、ただすら／＼とさういふ言ひ訳をしたのだが、この言葉は後々まで伊東伴作の頭に残つて離れなかつた。ただ女を養つておくといふだけの男が毎日々々午後三時から深夜まで女の部屋に居浸りといふ莫迦な話もないもので、誰が見ても男の二号であり女の旦那であることは分る筈だ。紅庵が独身者で情痴の世界にうといにしても信じられない話で、殊に紅庵は潜在的な性慾に疲れた人がもつところのその方面には特に鋭い電気のやうな感応と想像力を具へてゐるから、常人よりもよつほど素早く二人の関係が見抜ける筈だと思はずにゐられなかつた。なるほど紅庵自身の方は女の部屋へ喋りにくるだけで満足することもできるのだから、自分の心境にあてはめて、伊東伴作と露子の間もそれくらゐのものと案外軽く見てゐたやうに思はれないこともないが、あの旺盛な感応力があるためにすっかり内攻に疲れてしまつた紅庵の広く深い精神生活を考

へてみると、そんな子供騙しのやうな言ひ訳はきかないことで、やつぱり常人以上に素早く二人の肉体の交渉に氣付いた筈だと断定せずにはゐられなかつた。その紅庵がなんで又白々しく二人の關係に氣付かなかつたと言ひだしたのだらう？ 生真面目のやうで案外底意地の悪いところもある紅庵だから、神妙に言ひ訳するやうな顔をして実は冷やかし半分の氣持が腹の底にあるのかも知れぬが、それはそれとしておいて、このうっかりした言葉の中には紅庵のほんとの氣持が隠されてゐるのではあるまいかと伊東伴作は考へた。

つまり雨宮紅庵は惚れた女を連れ出しはしたものの、かくま匿ふ場所に窮して、安全な隠れ家を探したあげく、伊東伴作に女を一時まかせておくといふ手段のあることを發見した。といふのは、伊東伴作も幾分紅庵に似たところのあるデイレツタントで頭の中には過剰すぎる考へごとが渦まいてゐても実行力はないといふ、すくなくとも紅庵の考へでは自分の親類筋の一人のやうに見当をつけた形跡がある。伊東伴作に女の身柄を預けておくぶんには、女の身体が汚されるといふ心配はまづないやうに計算したのではないだらうか？ 女を連れてくる早々、男と女のことだから自然に二人の關係が身体のことに進んでみてもやむを得ないことぢやないかと無理なくらゐる言ひ強めたのも、今となつて考へてみると、つまりお前にはさういふことができないのだと多寡をくくつて冷やかしてゐた文句のやうにとれ

ないこともないのであつた。多寡をくくつて冷やかすといふほど露骨なものではないにしても、肉体の交渉をおよそなんでもないことのやうに言ひ強めた心理の底には、逆に肉体の交渉が紅庵にとつては最大の関心事であつたことを示すところのものがあると解釈しても不当のやうには見えなかつた。さういふ風に考へてみると、毎日夜がくるたびに伴作を落子の部屋へ残しておいて、自分は甚だ氣を利かしたやうな勿体ぶつた様子をしながら、そのくせ案外うろたへ氣味で歸つていつた、紅庵の姿を思ひだすと、さういふ姿の半分くらゐが例の通り半ば意識し計算した身構えではあるにしても、計算をはみだしたところにこの男の全悲劇が錯雜を極めたもつ纏れかたで尻尾をだしてゐるやうに見え、それを思ふと伊東伴作は悒鬱だつた。どの程度に落子を好きかは分らないが、彼に隠してアパアトへ越してから紅庵のうろたへ様は目にみえるやうで、その紅庵が思ひ余つた揚句、こんどは逆に伴作に隠して女を引越さしたとはいふものの、隠しきれずに斯うしてのこゝ現れてくる姿を思ふと益々伊東伴作の悒鬱は深まつた。悒鬱ついでに落子と手を切つてしまはうかと考へたりしたが、肉の執着に代えてまで悒鬱と心中する氣持にはなりきれぬものでなかつた。肉の執着がはつきり分ると生半可の悒鬱は消え失せて、紅庵の姿が莫迦々々しく思はれてきたばかりか彼の遣り口が改めて癩にさはつてきたりした。

「どういふわけで唐突に引越す必要があつたのだ？」と伴作は訊ねた。

「実はね、あの人のうちの方である住所に気付いた形勢があつたんだ。僕でさへ知らなかつた住所に気付くのは可笑しいと思ふかも知れないが、偶然気付く理由があつたんだ」

「それならなにも僕のあとをつけて住所を突きとめるやうな面倒をするまでもなく、僕に相談してくれた方が早道の筈ぢやないか」

「君の言ふことは理窟だよ。当然さうすべきやうな事柄でも、案外さうもできない事情といふものがあるものだよ。元はといへば女を連れだした僕から起きたことなんだから、君に面倒をかけずに僕の手でなんとかしようとしたことも一因なんだ。とにかく僕は君とあの人の関係がそこまでいつてゐることに気付かなかつたものだから」

それ以上のことになる<sup>う</sup>と巧みに言を左右にして、急に音楽を論じたりしながら全てを有耶無耶<sup>やむや</sup>に誤魔化し去つたが、忙しいからと言って匆々<sup>そうそう</sup>に腰をあげ、露子の住所だけ知らせて帰つていつた。

新しい下宿を訪ねてみると、谷底のやうな窪地の恐ろしく汚い家の二階だつた。階下には軍隊手袋を内職にしてゐる婆さんが脇目もふらずに仕事をしてゐた。その連合<sup>つれあい</sup>は郵便局の集金人で、ほかに家族はないさうだつた。

過失を怖れ怯えた様子で出てくるものと思つた露子が、顔には単純な喜びのみを漲らし、喜びの叫びをあげて飛びだしてきたので、伊東伴作は面喰つた。

「どんなに待つてたか知れないわ。どうして早く来て下さらなかつたの？」

と、露子は声をはづませて言つた。

「漸く今しがた居所が分つたやうな次第ぢやないか。紅庵はとづくに居所を知らせたやうに言つてたのかい？」

「いいえ、さうも言はないけど、雨宮さんは昨日から姿を見せないもの」

「雨宮は何も話さないが、周章てて引越したほんとの理由はどういふところにあるんだい？ ああの男は有耶無耶の誤魔化しばかり言つてゐて、僕には皆目のみこめないのだ」

露子は表情の失せた顔付をして暫く黙つてゐたが、

「みんな言つてしまふわね。隠してゐると気持が悪いわ」と言つた。さうは言つたものの又暫くためらつたのち、

「憤慨しないで下さいね」前置きして語りはじめた。

「ほんとは私にハズがあるの。ハズのところから逃げだしてきたのよ。ところが雨宮さんはあのアパートにハズの友達があるつて言ふの。雨宮さんは私があつたアパートにゐること

を知らずに、お友達のところへ遊びにきたんですって。そしたらそのお友達が同じアパートに私のゐることに気付いてゐて不思議がつてゐたつて言ふのよ。そこであのアパートにゐたんぢやおそかれ早かれハズの耳にも伝はるからと言ふので、その人の留守のうちに一時も早く越した方がいいと言つて、あたしもすつかり面喰つてその気になつたの。その朝のうちに忽ち此処へ越してきたのよ」

「アパートに友達があるなんて、そんなことは大嘘だ。紅庵は僕の後をつけてきてあのアパートを突きとめたのだ」

「そんなことかも知れないわね。きつと黙つて引越したのが癪にさはつて、こんな悪戯をしたのでせうよ。やりかねないことだわ」

と、なんとなく神経の鈍い感じのする落子がそれとなく紅庵のからくりを勘づいてゐたらしい口振も伊東伴作の予期せぬところで、いささか彼を驚かしたが、幾分ためらつたのち続いて落子の言ひだした言葉は愈々伴作を面喰はした。

「あの人のすることはなんとなく秘密くさくつて割りきれないものがあるやうだわ。人の知らないところで、しよつちうコソ／＼企らんでることがあるやうな感じよ。あたしに家出をさせたのなんかも、近頃考へてみると、なんだか企らみがあるやうで気味が悪いわ」

「紅庵がわざ／＼君に家出をさせたんだつて！」

「さうなのよ。いつたい私のハズつてのが性的無能者なの。酔つ払ふと誰にでもその話をして泣きだしちやふから、雨宮さんもそのことを知つてゐたわけよ。もうかれこれ一年近くになるんだけど、ハズが無能者だつてことが分つて以来——これは近頃思ひ当つたのよ、雨宮さんの遊びに来かたが頻繁になつたし、それに、私や私のハズに向つて話すことがいつも決まつて人間は面白おかしく暮さなければ損だといふことなの。つまり貞操だの一夫一婦だのつてことに拘泥せずに、もつと気楽に快樂を追ひ、したい放題に耽らなければ生きてゐる値打がないつていふ理論なの。勿論私にだけ言ふわけぢやあなく、ハズに向つて言ふ時の方が却つて多いし、とつても熱心に力説するのよ。それがいつものことだつたわ。聞きてが私一人のときは、話すことが一層微細で通俗的で具体的よ。つまりどこの誰それはどういふ浮気をしてゐるとか、どこの誰それは夫婦合意の上で浮気を許し合つてゐるとか、そのためにその人達の身边が爽やかで、遊びに行つてみると如何にもこつちまで気持がのび／＼するやうだ、なんて話すのよ。普通の夫婦でもなんだから、まして無能者を良お人にもつ女は当然浮気の権利があるんだつて、そんなことまでハッキリ言つたわ。とても真面目に、厳肅な顔付でハッキリ言ふのよ。聖人のやうに厳肅で、私を口説くやうな素振

りなんか微塵もないし、あの人自身が浮気さうな感じなんかどう考へてもないやうだから、あの人の言葉が怖いくらゐる真理にきこえてくるのよ。本気に私を憫んで、さういふ聖人のやうな憫みかたで私の人生に忠告を与へてくれるやうに思はれたわ。雨宮さんが帰つてしまふと奇妙な人だわと思ふくらゐで、あの人の言葉なんか滅多に思ひ出しもしなかつたけど、知らないうちに、私もだん／＼その気になつてゐたんだわね。貴方に始めて会つたでせう。あの日ハズと相当深刻な喧嘩をして、今日こそ別れてしまはうかと考へたりしてゐるところへ雨宮さんがやつてきたの。私が喧嘩の話をして別れようかと思つたほどよと何の気なしに言つてしまふと、あの人ひどく真剣な顔付になつて、そんならすぐにも家を出なさい、一緒にでませう、愉しく暮すことのできるやうな男の友達も紹介してあげるし、なんとかして生活も困らないやうにしてあげる、然し自分自身にはその資力もなし野心もないからつて言ふんだけど、あの人の態度はその時がいつよりもいつと真剣で厳肅で大きな憫れみが籠つてゐるやうで、あの人自身の野心なんか一つだつて見当らない様子だから、ほんとに頼りになると思つたのよ。まるで魔術にかけられたやうにふら／＼家を出ちやつたの。でも貴方のおうちへ始めて伺つて、この人は女優になりたいさうだけど、なんて言ひだされた時には吃驚したわ、どうせ貴方が拒絶することを見抜いておいて、恰好だけで

もつけておくために言つたことかも知れないけど、私の方ぢやそんなことをあの人に言つた覚えもなし日頃考へた記憶さへないほどなんだもの、ほんとに吃驚しちやつたわ」

「それぢや君のハズつて人は、西沢といふ詩を書く人ぢやないのか？」

「ええ、さう。知つてるの？」

「フウム」と伊東伴作は思はず心の中に唸つた。

「君のハズの話は、それから君の話も、かれこれ一年ぐらゐ前から度々紅庵にきかされてゐたよ。つまり亭主が無能者で、女房の方は勿体ないほど綺麗なんだが、肉体のほんとの快樂を経験しないせいが無意識には相当ヂリ／＼した不満を感じながら、それが性的な原因から來てゐることにさへ気付かないやうだと言ふんだね。あのままにしておくのは勿体ないから大胆に本能的な生活をするやうにと勧めてゐるが、といふやうなことを言つてゐたが、それぢやなんだね、紅庵はもうその頃から君の家へ繁々通つてほんとに浮氣を奨励してゐたわけか。さういへばあの当時も、どうだい二号にするつもりなら世話をするがといふやうなことを、これは冗談半分だつたが、きいたやうにも覚えてゐる……」

伊東伴作の脳裡には、今まで無意識のうちに気付いてはゐたが別段それを明瞭な形にまとめあげる機縁もなく必要もなかつた雨宮紅庵の裏面の姿が、一気に歴々と浮きでたやう

な思ひがした。伊東伴作の記憶を辿れば、雨宮紅庵が落子に関心を持ちだしたのは一年以上も昔のことにさかのぼる。実際はそれ以上の、恐らく紅庵が始めて落子を見た時間から彼の秘密の姦淫は育ちはじめたと見ることもできよう。あの頃のことを思ひだすと、紅庵は落子のことを語るたびに、落子が自分に気のあるやうな、殆んど落子に口説かれかねない形勢にでもあるやうなひどく思はせぶりな話し方をするかと思ふと、落子の正体が白痴のやうに単純で余りにナイーブであるために、内にあふるるやうな肉感を蔵してゐてもなんと可憐でたうてい手なぞはつけられないのだと妙に泌しみ々言ひだしたり、そんなことを言つてゐるうちに自分の感傷にひきづられた形で、今迄の凡そ官能的な話とは逆に今度はひどく精神的なことばかりを殆んど支離滅裂に言ひ強めたりするのだつた。けれどもたとへば落子に一本の煙草を渡された時の、その真つ白な、腐肉のやうな光沢をたたへた、柔軟な鞭のやうな一本の腕について語りだすところの精密な描写などを思ひだせば、最も飢えた一人の男がその飽くことを知らない食欲を通して一皿の妖しく焙られた豊肉を眺めるやうな、余りにも痛々しすぎるほど焼けただれた官能の悲鳴をでも聞くやうな思ひがして、寧ろ甚だ陰惨なるものを感じ、面を背けずにゐられぬやうな苦しさを味ふ心持をするのだつた。もとより惚れるといふほどの真剣な気持ではなかつたにしても、親しい女友達の黠

い雨宮紅庵にしてみれば、秘かに情炎の絵巻物をくりひろげる時の最も実感ある対象は日頃親しい落子のほかになかつたわけで、さういふ意味では彼の最愛の情婦だつたに相違なかつた。

最愛の心の女を人の二号に世話をする、一見甚だ奇妙のやうに思はれて、さういふことは有り得ぬやうに思はれるから、落子を伊東伴作のもとへ連れこんできた紅庵の気持は仕事の世話でもしてもらひ、あはよくば純粹に生活の保証だけをしてもらふといふぐらゐのところ、二号の世話を焼く意志などは微塵もなかつたことのやうに考へられるが、然しつらく考へてみると然う単純に言ひきれぬものがあるのだつた。そもく紅庵が伊東伴作をつかまへて、落子を二号にしたらどうかと言ひだしたのは今度が始めてのことではなく、伴作のもはや半ば失はれた記憶の奥を辿つてみると、勿論極めて無責任なその場限りの冗談としての話であつたが、かれこれ一年近く前からさういふ言葉が少くとも二度三度は紅庵の口から洩れてゐるやうである。もとよりこのくらゐの冗談は誰の口にもありうることでそれ自体としては奇も変もないが、冗談から駒がでたといふものか、これが現在ほんとの話になつてゐる事態の底を綿密に探つてみれば、雨宮紅庵自身すら気付かぬところの一つの強力な潜在意志が彼の秘密の情慾に沿うて流れ、この冗談の底に作用はたらいてゐた

と思はれぬ節もないではない。つまり雨宮紅庵のある隠された心の奥では、自分のこのたびの恋情が如何様に熾烈の度を加へるにしても、自分と女との交渉がこれまでのところ恰も袴をつけた道学者の如く四角張つた身構えにあり、窮屈な仮装を強ひられて身動きもならぬ状態にある限りに於て到底この上の展開に見込みがなく、又自分の引込思案な性情としては到底自らこの仮装をかなぐりすてる底の一大勇猛心をふるひおこす天来の奇蹟も望みが薄いとなつてみると、自分の恋を自分の恋の形に於て成立せしめる見込みは先づ有るまいと言はなければならぬから、そこで落子を他人の手で墮落せしめるといふ手段によつて秘かに医されぬ自らの情慾を慰めようといふ斯様に変態的なカラクリがひそかに作用いてゐたのではあるまいか？ かうまで整然たる筋を具へた心のカラクリではないにしても、もつと曖昧模糊たる異体の知れぬ混沌状態に於てなりと、とにかく落子を他人の手をかりてまでも墮落せしめ、情痴の坩堝の中へ落し、かうして炎上する芳醇な又みだらな氣配を飽かず眺めることによつて、自らの医し難い情慾をひそかに慰めようといふ、さういふ変態的なカラクリが潜在したであらうことは必ずしも言へないことではないやうだつた。或ひは又、無能者を良人に持つ美貌の一女性が医されぬ性慾に身悶えて道ならぬ恋に走るといふ、必ずしも落子に限つたことではなく、從而紅庵自身に直接何等の關係はな

くとも、単にさういふ事柄のもつ何やら息づまるやうなあくどい情慾の雰囲気だけが己にして彼に好ましかつたのかも知れない。所詮雨宮紅庵は何時に限らず自身の恋を自身のものとして完成することはできさうもない男であつて、他人の恋を垣間見てもそれが忽ち己れの秘密の情痴の世界に展開してくるといふやうな円融無碍むげの神通力を心得ており、同様に自分の恋情を他人の情事の姿に於てもとにかく不充分ながら満しうるといふやうな、他人の色事を垣間見て無上の法悦を覚える底の摩訶不思議の性能を具へてゐるのかも知れなかつた。

それにしても頼りないのは露子その人の氣質であり心事であつた。はつきりした自分のものといふ信念なり考へなりがあるのやらないのやら、どうにも確しつりした心棒といふものが皆目見当らない感じで、甚だ頼りないのだつた。けれども然しかういふ心許ない女の姿が、その人に執着を持ちはじめた男にとつて却つて可憐な風情を添え、並ならぬ魅力を發揮することもあるやうに、伊東伴作の仇心もやや執着に成りはじめてゐたのだつた。

露子の甚だ頼りない有様といへば、たとへばその日改まつて斯ういふことを切りだしたのである。

「自分で独立できるやうな商売を始めさせて下さらない？　どんな商売でもいいわ」

落子の顔は真剣だった。

「いつまでこんな風ぢや心細いわ。自分で自分の生活だけはやってけるやうにしておきたいの。洋裁でも美容術でも写真でもタイプライターでもなんでもいいわ。一年くらゐで独立できるやうになるわね。私だつてその気で勉強すれば一人前のことは覚えられると思ふわ。おでん屋とか喫茶店だつていいのよ。とにかく自分の生活費ぐらゐ自分でなんとかしたいのよ」

伊東伴作は吃驚した。この女でも自分の力で生きたいやうな能動的な生活慾があるのかと思つた。あたりまへの奥方とか二号といふものに納まつて至極ほんやりと暮すだけで、ほかに慾も根気もないのだと思つてゐたのだ。

「君でもそんな激しい生き方がしてみたいのか？」と伊東伴作がやや驚いて落子の顔を見直すと、

「あたしだつて——」

と落子が紅潮した顔をあげて、その言葉を掴みだすやうな激しいものを感じさせながら、「命もいらぬやうな激しい恋愛がしてみたいと思ふわ」

と答へたので、伊東伴作は益々もつて面喰はずにゐられなかつた。そろ／＼自分の国を

出外れて、よその国へ踏み迷つてきたやうな勝手の違つた感じさへしはじめたが、面喰つて戸惑ふよりも、どうやら陶然とするやうな何やら一脈爽快味のある異国情趣に打たれたことも否めなかつた。

ところがその翌日、伊東伴作が露子の宿を訪れようと思つてゐるところへ、雨宮紅庵が外面だけは相当逞しい遠慮気分を漂はせながらやつてきた。つまり今後は案内知つた隠宅とはいへ主人伴作の許しを受けない限り滅多に一人で訪れはしないぞといふやうな、鹿爪らしい遠慮気分を生臭いぐらゐぶん／＼発散させながらぬツと現れてきたのだつた。そこで二人は無論相談するまでもなくやがて連れ立つて露子の宿へ歩きはじめたが、歩きはじめたと思ふと紅庵が重大な進言でもする内閣書記官長といった勿体ぶつた顔付をして妙なことを言ひだした。

「どうだね、二号をただ遊ばせておくといふ不経済な手はないが、商売でも始めさせたら洋裁とか美容術といふこともあるが、これは店を開くまでに相当修業の時間がかかるだらうしね。喫茶店とかバーといふものはどうだらう？ 儲からないまでも損といふことはないものだよ。巧く行けば結構君が遊んで食つて行けるくらゐの繁昌だつて、あながち望めないことではないね。露子さんほどの美人なら、あの人ひとりでも相当の客がつくと思ふ

が……」

これをきくと、伊東伴作は驚くよりもやや呆れかへつた形で、

「なるほど、それで読めた！」と思はず叫んだほどだった。

「どうも落子の頭からああいふ考へがでてくるのはおかしいと思つたが、それぢやあ君の意見を受売りしてたんだね。実は昨日落子からそつくり君と同じことを言はれたのだが」

「冗談ぢやないよ！」

と紅庵は飛びあがるほど吃驚して、大袈裟な身振りまで起しながら猛烈に否定した。

「こんなことを言ふのは君だからのことなんだ。いや、もう先から君に内々不満を感じてゐたのだが、どうも君は僕を誤解してゐるよ。君はこのたび如何にも僕が裏へ廻つて何かと策謀してゐるやうにとつてゐるらしいが、それは甚だ迷惑な誤解だよ。今日のことだつて落子さんに訊いてもらへば分ることだが、君だからこそ心やすだてに斯ういふ進言もするわけで、いくらなんだつて君に話しもしないうちに斯んな入れ知恵を秘密つぽく吹き込むものか。いや、これで君の氣持がよく分つたよ。どうも先から変な誤解をしてるんぢやないかと疑つてゐたのだ」

「さう大袈裟にとりたまふな……」

と、こんどは伊東伴作の方で紅庵の大袈裟な氣勢に少々驚きながら、おさへて言つた。

「僕がさつき君の言葉をきいて面喰つたのは、君が露子に入れ知恵をしたといふ事柄に就てではなく、昨日の露子の意見がどうやら露子自身の頭から出たものではないらしいといふ理由からだよ。なにしろ昨日は露子からその話を切りだされた時は、この女でも時にはこれくらゐの考へごとをめぐらしてゐるのかと思つて確かに吃驚したのだからね。だいたい君はひどく大袈裟に騒ぐやうだが、たかがこれくらゐの入れ知恵を、よしんば實際吹きこんだにしたところで、別段誰を陥れるといふ事柄ではなし、却つて逆に僕達の利益になることを言つてくれたわけだから、君がこれくらゐのことに拘泥こたわつて大袈裟に騒ぎだした理由といふものが、却つて僕には呑みこめないやうなものだよ」

然し紅庵は却々これだけで納得しさうな見幕ではなく、改めて伴作の誤解といふことに就て執拗にくどくどと詰るやら言訳けやら詠歎やら手を代え品を代えの目まぐるしい変化で述べはじめたが、そのことはとにかくとして、その日紅庵も歸つたあとで折をみて露子にききただしてみると、紅庵の莫迦々々しいほど大袈裟な見幕だけでも今度に限つてさういふ策謀のないことはほぼ見当がついてゐたが、果して露子もさういふことは確かになかつたと答へた。けれども露子は暫く何やら思ひださうとするやうな様子ので、斯う言

ひだした。

「だけど、さうね、雨宮さんはそのことを昔はしよつちう言つてゐたわ」

「昔つて、いつのことだ？」

「半年も、一年くらゐも昔のことよ。結婚なんて窮屈だから、なるべくそんな束縛を受けないやうな生き方が賢明だつて言ふのよ。つまりバーなり喫茶店なり開かせてもらつて、面白おかしく暮すやうな工夫をする方がいいつて言ふの。その話はよくきかされたわ」

「なるほど」伊東伴作は心の底で、やつぱりさうだと思はず大声で叫んだのだつた。

昨日今日紅庵にそのかされた事柄ではないにしても、底の底まで探つてみると、女の行動や考へ方の隅々まで紅庵の執拗な感化が行きわたつてゐるやうな気がした。執拗な感化があくどく行きわたつてゐるだけに、落子はなんとなく紅庵に反撥を感じ、紅庵の知らない所へ引越したいやうな考へを起したりするが、要するにその反撥の裏を辿れば、家出してから落子の考へや行ひの一つ一つが紅庵の影響のもとにあり、落子そのものの本体まで紅庵の生臭い臭気から抜けでることができずにゐるのではあるまいかと伊東伴作は考へたのだ。落子がさういふ頼りない状態にあり、全く無意識に紅庵の思想の傀儡となつて動くものとしてみると、紅庵のことだからろくなことを吹きこんだ筈がなく、バーでも開

いて男を探し、男から男へといふ風に面白おかしく、とても毎日喋つてゐたのだらうが、それをそつくり実践されては堪らないと伊東伴作は怖れをなして考へた。然しいくら露子だつてまさかにそこまでは踊るまいとせいぜい気休めを弄んでゐると、露子への愛着はもはや牢固として抜くべからざる妄執に變りはじめてゐたのだつた。



# 青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 02」筑摩書房

1999（平成11）年4月20日初版第1刷発行

底本の親本：「早稲田文学 第三巻第五号」

1936（昭和11）年5月1日発行

初出：「早稲田文学 第三巻第五号」

1936（昭和11）年5月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：今井忠夫

2005年12月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雨宮紅庵

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>